

5月12日（土）PTA 総会

「“しつける”ということ」

皆様こんにちは。4月から校長として着任いたしました狩野博臣と申します。どうぞよろしくお願ひいたします。

濱田 PTA 会長様には過分なご挨拶を賜り、職員へのお褒めの言葉を賜り恐縮しております。ありがとうございました。

皆様、大変ご多用な中に PTA 総会にご出席賜りありがとうございます。本日の総会には7割を超える保護者の皆様方にご出席を賜りました。また、本会を受けて来週実施いたします報告会にご出席いただく方々と合わせると9割を超える保護者の皆様にご出席いただくこととなります。本当にありがとうございます。これも保護者の皆様方からの本校に寄せていただいております期待の高さであると思っております。先ほど歓迎演奏をした吹奏楽部の曲どおり「虹色の未来」に向けて教職員一丸となって進んでまいります。

さて、4月に初めて校長室に入った時、机の上うちの職員から次のようなことが書かれたメッセージカードが置かれていました。「口加高校の最大の自慢は、何と言っても生徒です。生徒たちのピュアなハートと素直さは県下一と自負しております。」という内容でした。このことばを読んだとき、感激しました。県下に56校の県立高校がありますが、「おたくの学校の自慢は何ですか？」と聞かれて、「生徒です。」と答える学校はそうないと思います。「自慢は？」と問われて、真っ先に生徒が浮かぶうちの職員、そして何よりもそう答えさせる子どもたち。まさに校長冥利に尽きます。

これは、教育の原点である家庭での育ち、教育、“しつけ”によるものに他なりません。そして、私たちも学校という場で、授業や部活動、また学校行事などを通して、生徒たちの“しつけ”をしております。ここで言う“しつけ”というのは、裁縫のしつけ縫いと同じ意味です。裁縫では、まず仮にざっとしつけ縫いをします。そのあとに本縫いをすることで縫い目が狂わず、奇麗に仕立て上がります。仕立て上がると、躰糸はすっと抜かれて、何事もなかったかのように縫物が完成します。人を育てるのも同じで、一人前に育てるにはまず躰縫いが必要です。私も子どもの頃、親から頭を押さえつけられながら「ありがとう、って言いなさい。」とか「ごめんなさい、って言いなさい。」と促されてきました。それが“しつけ”で、それが身につくと自分で判断して行動し、自立して世の中を渡れるようになります。

“しつけ縫い”がなされていなければ、型崩れして一人前の人間にはなりません。またいつまでも躰糸をぶらぶらさせていても自立した人間にはなりません。私は、親とか教員というのは、躰糸のようなものだと考えています。子どもの年齢に応じた躰縫いをして、時期が来たらすっと抜く。それを教育と言うのだらうと思います。

高校時代はまだ躰縫いが必要な時期です。もしかしたら、子どもさんを見られて、「山のような宿題を夜遅くまでしないといけないのはかわいそう」とか「土日も部活動とか模擬試験で遊ぶ時間もなくて大変ね。」とか思われることがあるかもしれません。フランスの哲学者のアランがこう言っています。「ケーブルカーで来た者には、登山家と同じ太陽を見る

ことはできない。」私たちは、汗一つかかずに楽をさせて山の頂上に連れて行くのではなく、きつくても、つまずいても、休みながらでも、時間がかかっても、自分の足で山を登り、登山家が見る太陽を見せてやりたいと思っています。それは、それこそが生徒への愛情だと考えるからです。

日本全国には数千校に及ぶ高校があります。東京都立日比谷高校のように日本の政治の中心である永田町にある高校もあれば、山間部や離島、またうちのような半島部にある高校もあります。しかし、立地がどうであれ、永田町にしろ、口之津町にしろ日本一になれることが一つだけあります。それは、「生徒たちへの愛情」です。手前味噌になりますが、本校には優秀な職員がそろっています。本校の自慢が生徒であるように、私にとっての自慢はうちの職員でもあります。

これからも目の前の生徒たちに愛情を注ぎ、職員一丸となって生徒たちと共に未来へ進んでまいります。頑張ります。どうかこれからも変わらぬご支援を賜りますようお願いいたします。

本日は、お忙しい中にご出席賜り、真にありがとうございます。